

〈幼稚園教育〉

イメージしたことを表現する楽しさを味わわせるための環境構成と援助の工夫

～幼児が自ら作ろうと思うきっかけを探ることから～

豊見城市立とよみ幼稚園教諭 當 眞 房 江

I テーマ設定の理由

近年、幼児を取り巻く環境の変化が著しい。家族形態も近くに祖父母のいない核家族が増えてきた。保護者の就労形態も多様化し、それに伴い生活習慣の乱れ（遅寝、遅起き、朝食ぬきなど）が目につくようになってきた。また、情報化が進み幼児期から市販のおもちゃや携帯ゲーム、テレビ、DVD、インターネットなどの機器に触れて遊ぶなど受け身の遊具が多くなってきたように思われる。さらに、容易に遊び道具を手に入れることが出来るため、それらを使って遊ぶことが当たり前になり、身近にある素材を使って遊びに必要な道具を自分で作ったり、工夫して遊んだりする機会が少なくなってきたように思われる。

幼稚園教育要領解説の領域「表現」において、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」と示されており、幼児が生活の中で感動したり、考えたり、心が揺さぶられるような様々な体験を積み重ねること、自分の思いや考え、イメージしたことをのびのびと表現する楽しさを味わわせることが求められている。「幼稚園においては、日常生活の中で出会う様々な事物や事象、文化から感じ取るものやそのときの気持ちを友だちや教師と共有し、表現し合うことを通して、豊かな感性を養うようにすることが大切である」と示されている。内容(7)では「かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする」とあり、これは幼児が生活の中で体験したことや思ったこと、感じたこと、イメージしたことなどを物を媒介にして「かく・つくる」ことで友だちや教師に伝えたり、遊びに使って楽しむことを意味している。教師は、幼児がそれぞれの遊びの中で、自己表現しようとしている気持ちをとらえ、必要な素材や用具を用意したり、個々に応じた援助をしたりしながら、幼児の表現意欲を満足させ、表現する喜びを十分に味わわせることが必要である。

本園の幼児は明るくて人懐こい子が多く、元気があり園庭での遊びが活発である。室内の制作コーナーで取り組む姿は多くは見られないが、制作の好きな子は必要な材料や道具を自分から探し、時には教師に要求するなどして工夫しながら作って楽しむ姿が見られる。

これまでの保育を振り返ると、教師が素材や道具などの準備をし、課題を与え「かく・つくる」等の活動を一齐に取り組みさせることが多かった。その際、まるで関心を示さない子や、やり方が分からず不安がる子、楽しむことが出来ずに途中でやめようとする姿等が見られた。そこには幼児一人一人の特性を捉え、自由な発想を認め、気持ちにより添いながら「かく・つくる」の楽しさを感じさせる等の適切な援助が足りなかったと思う。教師主導の保育であったと反省する。

本研究では、幼児が自ら作ろうと思うきっかけを探ることから、イメージしたことを表現する楽しさを味わわせるための環境構成と援助の工夫について研究したいと考え、本テーマを設定した。

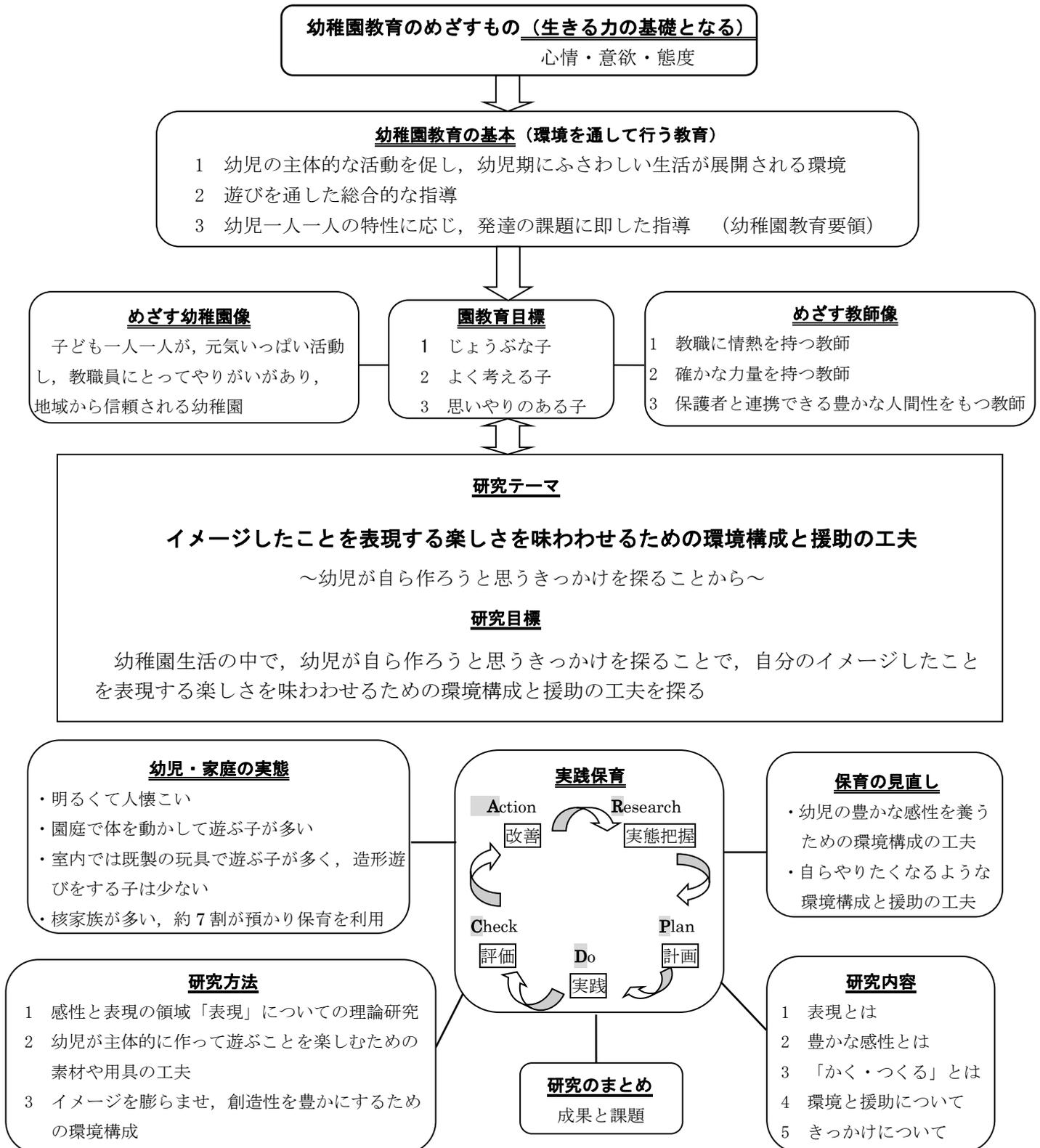
II 研究の目標

幼稚園生活の中で、幼児が自ら作ろうと思うきっかけを探ることから、イメージしたことを表現する楽しさを味わわせるための環境構成と援助の工夫を探る。

Ⅲ 研究の方法

- 1 感性と表現の領域「表現」についての理論研究
- 2 幼児が主体的に作って遊ぶことを楽しむための素材や用具の工夫
- 3 イメージを膨らませ、創造性を豊かにするための環境構成

Ⅳ 研究の構想図



V 研究内容

1 「表現」とは

表現について平田（2009年）は、意思のある「表」と内面の変化の「現」との組み合わせであり、「表」は子どもの発達や育ちの特性を理解すること、大人の概念で決めつけないこと。また「現」は感じ取ることが基本で、音や声、描線の強弱、指先から身体すべての動きまでの微妙な変化に反応できることが大切であると述べている。表現とは日々の生活の中で自分の気持ちを外に表す行為でありそれはコミュニケーションであると捉える。表現によって人と人とのかかわりが成り立っていくと考える。

つまり、表現は人間にとって生きる営みそのものであり、生きていく上で欠くことのできない大切なものであると捉えることができる。

2 「豊かな感性」とは

平田（2009年）は、「感性」とは、ただ感じることをいうのではなく、さまざまな感覚器官で身近なことを感じ、感じたことをもとに考えたり思ったりしたことを、具体的な行動に移すことで、「感じる」という入り口から、考えたり思うことを経て「行動する」という出口までの行為を「感性」というと述べている。

教師は、幼児が幼稚園生活の中で様々な事物や事象と出会い、感動したり、考えたり、心が揺さぶられるような様々な体験ができるようにすることが大切であると考えている。

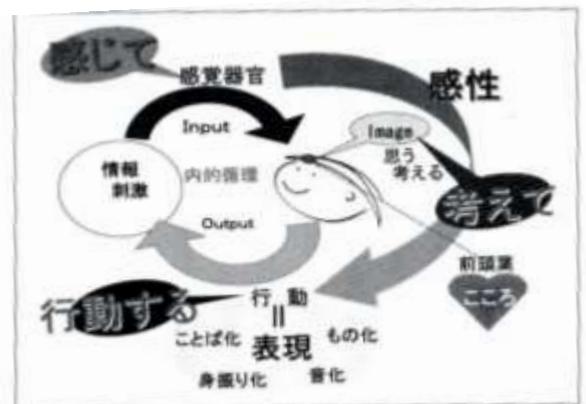


図1 内的循環論・平田説

3 「かく・つくる」とは

(1) かく

「かく」とは描画材を用いて、経験したことや想像したことをかくことである。

教師は、幼児へいろいろな技法を使ってかく楽しさを味わわせ、幼児の思いをありのまま受け止め、寄り添い援助することが大切であると考えている。

(2) つくる

「つくる」とは、材料や用具を用いて形をつくることである。

教師は、幼児が想像したものを形にしたり、ものとももの組み合わせたりする楽しさを味わうことができるように様々な材料や用具などを用意し、自由に「つくる体験」ができる環境を整えておくことが大切であると考えている。また、用具の扱い方や安全面への配慮も忘れてはならない。

4 「かく・つくる」における環境と教師の援助について

(1) 「環境づくり」の5つのポイント

① 強制しない

- ・子どもは「教えられること」からは学ばない。自分が「やりたい」と思ったとき、自分からおとなの模倣をしながら学んでいく。

② 出来上がったものを評価しない

- ・やたらに褒めたり、他の子の作品と比較したりしない。
- ・作ったものを「みて！」と差し出す子どもの気持ちに寄り添う言葉をさがす。

③ 出来上がったものは、おりにふれて飾る

- ・「すべて受け入れているよ」という姿勢を貫く。
- ・時には大切に展示をする。

- ・友だちの作品を見て友だちの良さにも気づけるようにする。
- ④ 教師自ら「感性のアンテナ」を立てる
 - ・子どもの実態を把握する。
 - 「作りたい」「おもしろい」「熱中する」「くり返しやりたがる」ってどんなこと？と探す。
- ⑤ 「かく・つくる」ことができる環境の整備をする
 - ・素材別に入れ、取り出しやすいように用意する。
 - ・のり、はさみ、セロハンテープなどの道具も手の届く場所に置く。

(2) 教師の援助

幼児が幼稚園生活の中で、イメージしたことをかいたり、つくったりすることを楽しいと感じるためには、個々のイメージしたことが実現できるように援助していく必要がある。

そのための援助として

○用具や遊具の特徴、使い方を知らせる。

例) セロハンテープ, 紙テープ, ガムテープなど 筆 (太, 細) クレヨン, マジック, 鉛筆, 絵の具など	}	用途によって使い分ける。
--	---	--------------

○イメージは持っても実現する技術が伴わない子もいるので、個々の技術の習得度を把握する。

例) はさみの使い方などの確認をおこない、個々に応じた援助をする。

○イメージがより明確になるように環境を構成する。

例) お寿司を作る, ケーキを作る・・・寿司やケーキの写真・絵の掲載された本を展示する。

○個の読み取りを行い、個のイメージに寄り添いながら必要な用具を用意したり言葉かけをしたりして、自分のイメージしたものが実現できることを認識させていく。

○家庭と違い、幼稚園にはいろいろな素材や用具があることを知らせる。

○友達のアイディアに気づけるような働きかけを行い、互いに刺激を受け共に育ちあえるようにする。

○時には友だちと一緒に作る協同的な取り組みを意図的に行い、一人では出来ないことも友だちと一緒にだと実現できることを体験させる。

○十分に遊び込むための、時間と場所を保証する。

5 きっかけについて

(1) きっかけとは

きっかけとは「ある事をするはずみや手がかりになるもの」(国語辞典)である。人が何かをする時、必ずそこにはきっかけがあると考えられる。幼稚園生活の中では教師に指示されて行うことも少なくない。

しかし、その時に幼児が「させられている」と感じてしまうと大人でもそうであるように、その楽しさは半減するのではないかと思われる。教師は、幼児が「させられている」と感じることなく、楽しく遊びながらいろいろな技法や手段を習得させていくことが大切であると考えられる。そのためには、「一人一人の幼児が今何を感じ、何を求めているか」など個の読み取りを行い、幼児理解を深めていくことが重要であると考えられる。そして、幼児の些細な行動を見逃さず、きっかけを大切にしながら幼児のイメージがより具体化しやすいように環境を整え、イメージしたことに寄り添いながら個々に応じた援助をしていくことが大切であると考えられる。また、幼児が自らやりたくなるような環境を用意したり、きっかけになるような様々な体験をさせたりすることが重要であると考えられる。

事例からきっかけを探ってみた。

(2) 事例と考察

① 事例

5月の晴れた日、A男が職員室へ虫かごを借りにやってきました。教師は「虫かごがない」ことを話し、どうしたらいいかA男に問いかけた。A男はすぐに教室へ行き、牛乳パックで虫かごを作り戻ってきた。虫かごを見た教師は、「両手が使えると便利」だとアドバイスをした。するとA男は教室へ行き、虫かごにヒモをつけて戻ってきた。ヒモは短かったが、A男は自分で作った虫かごを胸の前にぶら下げて元気よく園庭へ飛び出して行った。

② 考察

A男の要求に応じて、教師がすぐに虫かごを貸していたら、その後の「作る」という行動にはいたらなかったであろう。教師は「虫かごがない」ことを話し、その後A男とコミュニケーションを図りながら自ら虫かごを作るように仕向け、A男は自分なりに考えて虫かごを作っている。教師のアドバイスにも素直に耳を傾け、更に工夫してヒモをつけてきている。教師の考えていたヒモの長さとは違ったが、自分の作った虫かごに満足している。この経験からA男は自分のイメージした虫かごを作ることができたと考えられる。この経験は、教師の適切な言葉かけと、教室に用意されていた牛乳パックがあったから出来たことである。このことから、「きっかけ」を与えるための教師の援助と、素材を取り出しやすくいつでも自由に使えるように環境を整えておくなど、教師の意図的な環境構成が重要であると考えられる。

VI 研究の実際

1 保育実践（1回 6月12日）「自分でイメージしたものを自由に作って遊ぶ」

(1) 保育のねらい

身近にある素材を使って、自分のイメージしたものを作って遊ぶ。

(2) 検証のねらい

幼児の興味・関心のあるいろいろな素材を準備することで「やってみたい」という意欲を高め、自ら作りたと思うきっかけになるような環境や援助の工夫をする。

(3) 環境の工夫

- ・幼児の興味や関心のある素材や用具を準備する。
- ・自由に作ることができるように時間と場所を保証する。

(4) 援助の工夫

- ・幼児の発想を認めながら、さらにアイデアを引き出すように寄り添いながら言葉かけをしている。
- ・幼児の表現を温かく見守り、共感することで表現する楽しさを味わわせるようにする。

(5) 実践の流れ

月日	幼児の姿	考察	写真
6月12日 (水)	・月刊絵本を見たH男が「おばけ作りたい」と紙コップと割り箸の袋を使って本を見ながら作り始めた。「ストローがない」というH男にT男がすぐにストローを持って来た。ストローを受け取ったH男は「作ろうぜ」と言って、T男に教えながら一緒に作り始めた。2人の様子を見て4、5人の男児も加わっていった。	・教師は少し早いかと思いながら、季節のセミやひまわりの写真が掲載されていた7月号の月刊絵本を子供たちの見やすい場所に立てた。「おばけ」のページがあるのは知っていたが、すぐに制作に結びつくことは予想していなかった。しかし、制作に必要な材料を揃えてあったことが、幼児の「作りたい」という気持ちに添うことができたのではと考える。	<p>紙コップにどうやってくっつけようかな</p>

<p>6 月 12 日 (水)</p>	<p>(男児との会話) 教師「おばけ作ってどうするの？」 H男「オレ〇〇(弟)びっくりさせる」 T男「僕はママおどかす」 H男「じゃオレはママとパパおどかす」</p> <p>・折り紙コーナーで、掲示された「腕時計の折り方」を見ながらA子が作り始め、B子が「教えて～」と仲間に加わった。2人は準備してあった文字盤をハサミで切り取り、のりで貼り完成させた。出来上がった腕時計をはめて嬉しそうに見せてくれるB子。オリジナル腕時計に満足そうな姿があった。C子は出来上がった腕時計に、金色の折り紙を切って貼りつけている。自分なりに考え工夫して作った腕時計の仕上がりにも満足気であった。</p>	<p>・自分の作った「おばけ」で家族をおどかすという目的がはっきりしているため、作った「おばけ」は全員が家へ持ち帰ったのであろう。</p> <p>・折り紙棚には折り紙の本を常備してあるが、それを開いて作る子はあまりいない。しかし、題材の折り方を大きく掲示すると、それを見て作る子が出てくる。「腕時計」は興味・関心にあった掲示だったのだろう。また、文字盤を用意したことで折る作業に集中することができ、完成の喜びを味わうことに繋がったと考える。友だちの作っている様子に興味を示す子が増え、自分のアイディアを出し工夫して作る姿が見られた。</p>	    
-------------------------------------	---	--	---

2 保育実践 (2回 6月18日～20日)

(1) 保育のねらい

身近にある素材を使って、自由に作ったり作った物で遊んだりする。

(2) 検証のねらい

素材を精選し準備することで、幼児がイメージしたことを実現しようとするための時間と場を保証することから表現する楽しさを味わわせるための環境や援助の工夫をする。

(3) 環境の工夫

- ・幼児の興味・関心のある素材を精選する。
- ・素材とじっくりかかわれる時間と場所を保証する。

(4) 援助の工夫

- ・幼児の表現を温かく見守り、思いに寄り添った言葉かけや援助をすることで表現する楽しさを味わわせる。

(5) 実践の流れ

月日	幼児の姿	考察	写真
<p>6 月 18 日 (火)</p>	<p>・先週、紙コップを使っの「おばけ」作りが流行ったが、材料を段ボールに代えて発展中。3人の男児は段ボール箱を何個かガムテープでくっつけ、「おばけ屋敷」を作っている。2人が箱を手で押さえ、残った1人がガムテープで貼る作業を協力して進めている。途中、箱の中に入ったりして楽しんでいる。</p> <p>・近くで女兒3人も同じように段ボール箱で「秘密基地」を作っていたが、段ボ</p>	<p>・男児たちは、途中で何度もガムテープがはがれても諦めずに時間をかけて貼り付けていた。その姿から「作ったもので遊びたい」という気持ちもちが途中で制作を止めた女兒たちよりも強かったのではと思われる。途中で段ボールの家の中に入り、雰囲気を楽しんでいるように感じられた。</p> <p>・段ボールの数が足りず、女兒たちは途中で諦めてしまった。言葉かけ</p>	

	<p>ール箱が足りないらしく「もう1つ段ボールが必要なんだけど・・・」と訴えるが、男児たちは譲ろうとしない。結局すぐに諦めて、別の遊びへと移って行ってしまった。</p>	<p>をして別の方法をアドバイスした方がよかったのか？段ボールの数があったら、遊びは継続していただけるか？</p>	
<p>6月19日(水)</p>	<p>・昨日、不足していた段ボール箱を教師が補充すると、早速A男がその段ボール箱を使い「おばけ」作りを始めた。A男は、教師に「穴を開けて～」と頼み、指示通りにカッターで3箇所を丸くくり抜くと、それを頭からすっぽりかぶり両手を出し「おばけ」になって友だちを驚かせて喜んで居る。「色を塗った方がいいんじゃない？」と言葉をかけると「赤いおばけにする」とのこと。 赤色の絵の具と筆を用意したところ、A男は廊下に新聞紙を敷き、その上で色塗りを始める。 ・D子は段ボール箱で「びっくり箱」を作り始めた。箱の上と左右に穴を開けてもらい、ダンボール箱を頭からすっぽりかぶって、時々頭を出したり引っ込めたりして友達を驚かせて遊んでいる。</p>	<p>・A男は制作が大好きな子である。そのため、教師が持参した段ボール箱を目ざとく見つけることができたのではないかと。自分のイメージをしっかりと持って、穴を開ける場所やサイズ、頭や両腕の位置を指示してきた。色塗りも一人で最後まで頑張っている。きれいに塗られていない場所は何度も重ね塗りをしている。A男の真剣な取り組み、夢中になっている姿に感心する。 ・D子もまた制作が大好きな子である。A男の真似をして「おばけ」を作っているのかと思ったが、本人曰く「びっくり箱」との返事。頭を出す穴がA男とは異なり、段ボール箱の上にあることからD子なりのイメージを感じた（色はどうするのか？）。</p>	<p>赤いおばけにしよう～</p>  <p>見て～私のびっくり箱！</p> 
<p>6月20日(木)</p>	<p>・前日の続きの「おばけ作り」に励む子が多い。前日で色塗りを終えたA男は、かぶって友だちを驚かせて楽しんでいる。「何かつけてみたら？」と言うとイメージがわいたらしく、スズランテープを箱の前方につける作業を始めた（どうやら髪の毛らしい）。 ・女兒数人が段ボール箱を開きガムテープでつないで長くしている。「迷路を作る」とのこと。A男のおばけを見て「先生、色塗りたい」と言ってくる。教室につないだ段ボールを広げ、色塗りが始まった。それを見ていて、どんどん仲間も加わり色塗りが盛り上がる。絵の具が足りなくなると、2、3人が一緒に席を立ち補充して戻ってくる。 ・T男は、一人で黙々とロボット作りに励み、見事なロボットを完成させて満足げに見せてくれた。肩にはヨーグルトの蓋が使われていて、パタパタと動くように工夫されている。</p>	<p>・A男は赤いおばけにスズランテープを貼る作業を始めた。テープの色を何色にするか尋ねたところ、「何色でもいい」との返事。髪の毛になればいいので、色には特別こだわりはないようである。 ・女兒たちは始め手を汚さないように気をつけながら色塗りをしていたが、次第に大胆な塗り方に変わっていった。人数が増えていったため、絵の具がすぐになくなり、自分たちで何度も補充をしていく。必要なものは自分達で用意することができる。色塗りは楽しいようでどの子も集中して作業をしている。きっと絵の具での色塗りが女兒たちの興味・関心にあっただのであろう。 ・T男は友だちがおばけ作りを進める中、一人でロボット作りに励んでいた。ヨーグルトの容器2個を上手く活用し、工夫する姿に改めて感心させられる。</p>	<p>髪の毛をつけたら怖さがアップ！</p>  <p>ここもきれいにぬらないと・・・！</p>  <p>ヨーグルトの蓋</p> 

3 おばけ屋敷ごっこ（本時）までの実践経過

月日	幼児の姿	考察	写真
6 月 25 日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・「おばけ屋敷ごっこやりたい人」と呼びかけるとみんな集まってきた。「何が必要か？」を話しあったところ、いろいろな意見が上がり、それぞれが自分のイメージを膨らませ制作に取り掛かっていく。 ・色塗りをしている、手についた絵の具を偶然段ボールに拭く子がいた。そこで、「手形をつけても面白いかも？」と助言をする、みんなで手形をつける作業が始まる。 ・「チケットもあったほうがいい」との声を受け、コーナーを設置すると女兒たちがチケット作りを始める。 ・紙コップや紙皿で「おばけ」を作り、段ボールに吊す子や貼り付けたりして怖い雰囲気を出すために工夫する子も多く見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで、制作にあまり興味を示さなかった子も「おばけ屋敷ごっこ」について話し合いを持ったことで関心を寄せ、活動に参加していった。子供たちの期待が感じられる。 ・手を汚さないようにしていた子も友達の様子を見て「おもしろそう」と興味を示し一緒にやり出した。 ・色鉛筆やマジックで自由に絵や文字を書いて可愛く仕上げている。出来上がったチケットをかごに入れておいたところ、一人の男児が他のクラスにチケットを配ってしまい無くなるという結末に・・・(男児は他のクラスの子たちを「おばけ屋敷」に招待したかったようである)。 	<p>いっぱいつけよう！</p>  <p>どんなチケットがいいかな？</p> 
6 月 28 日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> ・こわい「おばけ屋敷」にするために、段ボールに色々と飾り付けをする子が多い。 ・チケットが無くなってしまったことを話し、改めてチケット作りを行う。教師がおばけのカットを用意していたため女兒たちがそれに色塗りをしながら沢山のチケットを作っていく。 ・教師の考えでアンダリアののれんの制作を子どもたちと一緒にする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・段ボールのおばけ迷路に自分の作ったおばけを吊す子が多くなり、雰囲気が出てきた。が、まだまだ小道具が必要である。 ・アンダリアでのれんを作り教室の一角に吊してみた。すぐに興味を示した子と一緒に、細く裂く作業をする。その後鈴を取り付け、触れると音が鳴るように仕上げた（音による恐怖感）。 	<p>どこにつるそうかな？</p>  <p>アンダリアののれん</p> 
7 月 5 日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆうぎ室に段ボール迷路をみんなで運び込み、簡単に設置してみる。 ・「おばけ屋敷ごっこ」について話し合う。 *役割分担をする・・・チケット係 おばけ係 お客さん *交代して行う（1回目と2回目） 	<ul style="list-style-type: none"> ・おばけ屋敷（ゆうぎ室）へ移動したことで、ある程度のイメージができたであろう。 その後、教室に戻り、「おばけ屋敷ごっこ」の日時や役割など細かく話し合うことで、さらに期待感も高まったのではないだろうか？ 	<p>ゆうぎ室</p> 
7 月 9 日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・「おばけ屋敷ごっこ」についての最終確認（役割、開始時間、その他）をする。 ・足りないものをみんなで作る。 ・お金を作る（チケットを買うため）。 ・画用紙でおばけ屋敷の看板を作る（文字をなぞって書く、絵を描く）。 ・みんなでゆうぎ室に小道具を運び込み、飾り付けを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ゆうぎ室に飾る「おばけ」が足りないため、トレーや牛乳パック卵パックなどの廃材を利用して作る。翌日に控えているため、みんな張り切って作る姿が見られる。看板の文字は教師が薄く書き、上からなぞり書きをしてもらう。文字の他に自分なりにマジックで絵を描き加える等、工夫をしている。子どもたちの「おばけ屋敷ごっこ」への期待感が伺える。 	 <p>ひとつめこぞう</p> 

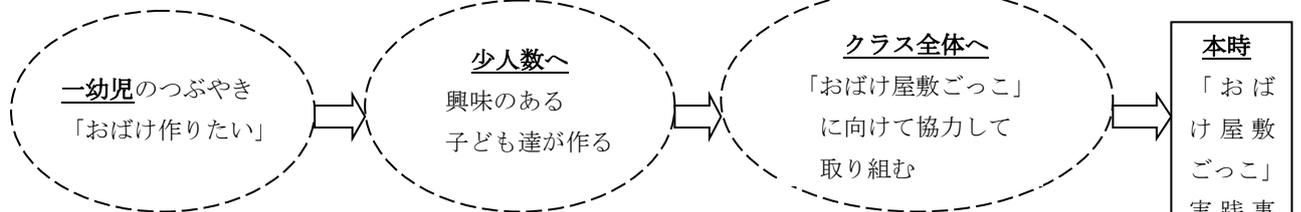
4 保育の展開（本時）7月10日（水）指導案

豊見城市立とよみ幼稚園（たんぼぼ組） 男児14名 女児13名 計27名 担任 眞房江			
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・身近にある廃品やダンボールなどを使って作ったり作ったもので遊んだりする姿が見られるようになってきた。 ・友だちと一緒に遊びを進めることを楽しみ、その中で自分の思いや考えを伝えようとするが、お互いに譲ろうとせず時にはトラブルになることもある。 	ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○自分たちの作った「おばけ」を使って表現したり、遊びに取り入れて楽しんだりする。
	内容	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちで作ったものを使い、友だちと力を合わせ「おばけ屋敷ごっこ」をする。 ・「おばけ屋敷ごっこ」で思い思いのイメージを表現する。 	
・予想される幼児の活動	○環境構成 ☆教師の援助		教育要領の視点
7:30	<ul style="list-style-type: none"> ・登園 ・身支度 	<ul style="list-style-type: none"> ☆笑顔で挨拶を交わしながら、一人一人を気持ちよく迎え健康状態を視診する。 ○必要な道具が取り出しやすいように、所定の置き場所を決め目印や絵で表示するなど、整理しておく。 	言葉 内容(6)
8:00	<ul style="list-style-type: none"> ・水やり ・うさぎの世話 ・運動遊び ・園庭（戸外）遊び 	<ul style="list-style-type: none"> ☆一緒に水かけをしながら、野菜の生長に気づけるような言葉かけをしていく。 ○運動用具は取り出しやすい場所に置く。 ☆暑いので、帽子をかぶったか確認する。 	人間関係 内容(3) 健康 内容(8)
9:00	<ul style="list-style-type: none"> ・片付け ・足を洗い入室 ・着替え 	<ul style="list-style-type: none"> ☆一人一人の頑張りを認めながら、個々にあった援助を行い、やる気が出るような言葉かけをしていく。 ○一緒に片付けを行い、きれいになった気持ちよさを共有する。 ○足ふきマットを用意し、汗で服がぬれた子へは着替えを促す。 	健康 内容(6) 環境 内容(5)
9:15	<ul style="list-style-type: none"> ・朝の会 ・出席確認（当番） ・話し合い「おばけ屋敷ごっこ」について ・ゆうぎ室へ移動 	<ul style="list-style-type: none"> ○みんなが揃うのを待って、揃ったら話し始める。 ☆恥ずかしがって声の小さい子には、耳元で教えたり言葉かけをしたり等安心感を与える。 ○役割分担を書いた紙を黒板に貼り出し確認する。 ☆ゴールしたらプレゼントがあるかもと期待感を持たせる。 	健康 内容(2)(3) 言葉 内容(1)
9:40	<ul style="list-style-type: none"> 「おばけ屋敷ごっこ」（1回目） ①スタート→ゴール ②ワッペンをもらう 	<ul style="list-style-type: none"> ☆ゆうぎ室での約束事を話し合い、共通理解をする。 ☆お客さんは教室で準備が整うまで待つ。 ☆教師の合図で「おばけ屋敷ごっこ」を開始し、入り口でチケット係と一緒にお客さんを案内する。 ☆教師もおばけ屋敷に入り、子ども達の様子を見守りながら一緒に楽しんだり、必要に応じて言葉をかけたり援助したりする。 ○BGMを流したり、室内を暗くしたりして雰囲気作りをする。 ○ゴールした子に係がおばけのワッペンをつけてあげる。 	表現 内容(8) 人間関係 内容(7)(8) 健康 内容(4)
*休憩（排泄・水分補給）	<ul style="list-style-type: none"> 「おばけ屋敷ごっこ」（2回目） 	<ul style="list-style-type: none"> ☆自分の好きな色や柄を選べるように色々のワッペンを用意する。 ○暑いので、水分補給や排泄を促し、無理のないように休憩時間を確保する。 	健康 内容(6) 環境 内容(6)
10:50	<ul style="list-style-type: none"> ・片付け 	<ul style="list-style-type: none"> ☆みんな協力して使った小道具を教室へ運ぶ。 	
反省・評価	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の作ったおばけを使って、みんなで「おばけ屋敷ごっこ」を楽しむことができたか。 ・皆で「おばけ屋敷ごっこ」を楽しむための環境構成や援助の工夫はできていたか。 		

5 「おばけ屋敷ごっこ」(本時)の活動の様子



6 「おばけ屋敷ごっこ」(本時)に至るまでのきっかけと流れ



きっかけ	・展示された月刊絵本を見て	・友達がやっているのを見て ・素材からのイメージ	・「おばけ屋敷ごっこ」をやりたい	本時 「おばけ屋敷ごっこ」 実践事例 (7/10)
事例	6 / 12	6 / 18~20	6 / 25~7 / 9	
環境と援助	・幼児のつぶやきに寄り添い、材料や用具などを揃えてあげる。	・素材や用具の準備 ・工夫を促すような言葉かけと個々に応じた手助け ・「おばけ」に関する絵本や紙芝居、教材等の展示	・イメージを広げるため「おばけ屋敷ごっこ」について話し合う。 ・イメージしたものを作るための多種多様な素材や用具の準備と援助 ・「おばけ屋敷ごっこ」に期待感を持たせるため、絵本や紙芝居の読み聞かせ、歌などを取り入れる。	

↓

全クラスで楽しむ

(1) 考察

- ・一人の幼児の「おばけを作りたい」というつぶやきから、興味を示した少人数へと次第に遊びの輪が広がり、最終的にはクラス全体で取り組む「おばけ屋敷ごっこ」へと発展していった。もし一人の子のつぶやきに寄り添わなければ、ここまで発展しなかったであろう。
- ・始めは自分のイメージだけで「おばけ」を作る子が多かったが、友達のものを見たり触れたり、作ったもので遊んだりするうち、一緒にかかわりながら作る面白さを感じているようである。面白いと感じたから、友達ともかかわっていたのだと思われる。
- ・「おばけ屋敷ごっこ」は、子ども達の興味・関心がそれぞれ違うにもかかわらず、教師の「全員お客さんになっておばけ屋敷を楽しんでほしい」という思いから役割分担をしてしまった。途中で交代させたことで、おばけ役の子の工夫が見られなかったのではないかと(1回目は上手く驚かせることができなかったため、次はこうしようと工夫することができなかった)。

- ・チケット係は子ども達に馴染みがないようで、イメージする「おばけ屋敷」ではなかったかもしれない。次回は、自分の希望する役を十分楽しませたい。
- ・「おばけ屋敷ごっこ」に至るまでに時間的な余裕が無く、子ども達が自分の作ったもので自由に遊び込む時間を設定できなかったことが、「おばけ屋敷ごっこ」が今ひとつ盛り上がり欠けた要因であろう。また、おばけ屋敷の設営を教師だけで行ったため、おばけとお客さんの距離が遠い、通路が広すぎる等の不具合が見られた。子ども達と一緒に設営することで、子ども達が更にイメージを膨らませ「おばけ屋敷ごっこ」を楽しむことができたのではないと思われる。

(2) 改善点（検証保育後）

- ・検証保育の翌日に、全クラスで「おばけ屋敷ごっこ」を楽しんだようだ。その際、クラスの子全員が「おばけ」役をやったとのことであった。当日は、どうすればみんなを怖がらせることが出来るかと工夫する姿が見られ途中、自分から受付（案内係）をする子もいたようだ。1回経験したことで、「またやりたい」「他のクラスに見せたい」という意欲が出てきたのではと思われる。自分達が作った「おばけ屋敷」で他のクラスが楽しむ姿を見て、自分達が主役という満足感と共に有益感も味わえたのではないと思う。そして、その取り組みが出来たのは、クラス担任同士の連携とチームワークがあったからだと考える。

VII 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 幼児が自ら作ろうと思うきっかけから

- ・教師が幼児の興味・関心にあった季節の本や図鑑、写真、音楽などを用意することは、ヒントやイメージが広がるきっかけとなる。

本（絵本・図鑑・月刊誌）や意図的掲示物を見て (VI-1)

(おもしろそう、これなら自分にも出来るかも)

- ・教師が友達の良さに気づけるように作品の展示の仕方を工夫したり、いろいろな遊び方を紹介したりすることで、友達のように作ってみたいなど憧れの感情が生まれる。

友達の作品や遊んでいる様子を見て (VI-1)

(おもしろそう、同じものを作りたい、一緒に遊びたい)

- ・教師が幼児の作りたくなるような多種多様な素材を分類、整理して身近に用意することで、イメージするものの素材が短時間で揃い、意欲の高まりが作る意欲へとつながる。

素材からのイメージ（これはこうして使えるかも？） (VI-2 VI-3)

- ・幼児が遊びを進めている中で、遊びを広げたり深めたりするために、その遊びに必要なものを作りたいと思う。

その遊びに必要なものを感じて (V-6-(2) VI-4)

(こんなものがあつたらもっと楽しいだろうな)

- ・幼児が行事（運動会・七夕・クリスマス・ひなまつり等）へ参加する際、より期待を高め、その行事までのプロセスを楽しめるように必要な素材を教師が意図的に用意する。

行事に対する期待感、共通目的 (VI-4)

(楽しそう、ドキドキわくわく感)

(2) 教師の意図的な環境構成から

- ・幼児がイメージにあったものを作るためには、目で見えてイメージしやすいように、素材の分類などを分かり易く整理して用意しておくことが効果的であると考えられる。
- ・イメージがわくような写真の掲示や、友だちの良さに気づけるように作品の展示を工夫することで、自分なりにイメージを広げ工夫できるようになることがわかった。

- ・身近な情報（テレビなど）をもとに、幼児の興味を捉え、幼児のイメージした小道具や大道具などを用意することで喜んで遊び、遊びながらそれ以外の必要なものを自分で考え作ることに発展していくことがわかった。

(3) **教師の援助から**

- ・イメージが広がるような言葉かけや、一人では困難な場面での援助を行うが、その後からは幼児自身で進めていけるように見守ることが大切であることがわかった。
- ・幼児の「作りたい」という思いが実現できるための、基礎的な技術や技能が習得できるような指導を行うことで達成感を味わうことができ、さらに意欲が高まり幼児自ら工夫することを知った。

(4) **研究を進める中から**

幼稚園教育要領「表現」の領域から研究を進めてきたが、表現する楽しさを味わわせるためには、「環境」「言葉」「人間関係」「健康」の全ての領域が相互的にかかわり成り立っていることから、援助の視点も「表現」だけに当てるのではなく生活全体の中から広く捉え、幼児の思いに寄り添い見守りながらタイミングを逃さずに援助していくことで、表現する楽しさを味わい、表現への意欲が育っていくことがわかった。

2 今後の課題

- (1) 幼児の興味・関心を読み取り、イメージにあわせた掲示物の内容の工夫（季節やタイミングなど）。
- (2) 友だちの良さに気づき、もっと作りたいという意欲を出すための展示のさらなる工夫。
- (3) 「作ることを楽しむ」ための、用具、素材などの基本的な使い方を幼児が理解できるような援助の工夫。

<主な参考文献>

- | | | | |
|--------------|----------------------------------|---------|-------|
| 豊泉尚美・松本のり子 著 | 『自然と季節を楽しむ 造形あそび』 | 黎明書房 | 2000年 |
| 黒川建一 編 | 『新・保育講座 保育内容「表現」』 | ミネルヴァ書房 | 2004年 |
| 文部科学省 | 『幼稚園教育要領解説』 | フレーベル館 | 2008年 |
| 花原幹夫 編著 | 『新保育ライヴラリ 保育内容 表現』 | 北大路書房 | 2009年 |
| 無藤隆・柴崎正行 編 | 『新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて 別冊[発達]29』 | ミネルヴァ書房 | 2009年 |
| 榎沢吉彦 編著 | 『保育内容・表現』 | 同文書院 | 2012年 |
| 『新幼児と保育』 編集部 | 『子どもとアート』 | 小学館 | 2013年 |